

# 不快音を伴う環境が自己開示に及ぼす効果

黒川 光流・登美 雄太<sup>1)</sup>

## 問 題

個人間で交わされるコミュニケーションのうち、特定の他者に対して、自己に関する本当の情報を言語的に伝達することを自己開示と呼ぶ（深田, 1998）。適度な量の自己開示は精神的健康を促進することが示唆されている（榎本・清水, 1992; Jourard, 1971 岡堂訳 1983）。また、適切な内容の自己開示には、開示者のネガティブな感情を浄化する、あるいは開示者の意見や感情を明確にするなど、開示者個人にとってポジティブな機能があるだけでなく、開示者と被開示者との関係を発展・強化するなど、二者関係にとってもポジティブな機能があることが示唆されている（安藤, 1990）。そのため、適切な自己開示に必要な条件について、多くの研究が行われてきた。

自己開示を規定する要因には、開示者の性（榎本, 1987）や生理的喚起水準（Rohrberg & Sousa-Poza, 1976）など開示者自身の要因、被開示者が返してくる自己開示の程度（安藤, 1986）や被開示者の性（Mulcahy, 1973）など被開示者の要因、あるいは関係の親密さ（高木, 1992）や社会的地位関係（Slobin, Miller, & Porter, 1968）など二者間の関係性の要因などがある。また、このような自己開示に関わる人に関する要因だけでなく、自己開示が行われる状況の要因に着目した研究も行われている。

例えば Skotko & Langmeyer (1977) は、男女それぞれに同性同士のペアで2, 4, あるいは10フィートの距離を置いて会話をさせた。その結果、男性同士のペアの場合は距離が近くなるほど自己開示の内面性が浅くなり、女性の場合には逆に距離が近くなるほど内面性が深くなる傾向が見られた。また Chaikin, Derlega, & Miller (1976) は、床の敷物や照明器具などが整い、壁には絵が掛けられているような「暖かい」感じの部屋と、照明器具や椅子などが粗末で、床や壁に装飾がないような「冷たい」感じの部屋とで自己開示の比較を行った。その結果、「暖かい」感じの部屋では、「冷たい」感じの部屋よりも自己開示が促進されていた。さらに有倉 (2000) は、自己開示が行われる時間帯に着目し、10:00-15:00の昼間と18:00-23:00の夜間とで自己開示の比較を行った。その結果、昼間は友人に対して内面的な自己開示が行われていたのに対し、夜間には初対面の相手であっても内面的な自己開示が行われていた。

これらの知見は、状況の快適さ、あるいはある状況において緊張を感じる程度の低さが自己開示を促進していると説明されることが多い。Skotko & Langmeyer (1977) の知見は、男性ペアの場合は相手との距離の近さによって快適さを低く感じたのに対し、女性ペアは距離の近さ

を快適と感じ、それが自己開示の内面性に反映されたと説明できる。また Chaikin et al. (1976) の知見は、「暖かい」感じの部屋の方が緊張しないため、自己開示が促進されたと説明できる。そして有倉 (2000) の知見は、夜間には緊張度が低下するため、初対面の相手であっても内面的な自己開示が行われたと説明できるのである。

状況の快適さに影響を及ぼす重要な要因として看過することのできないものの1つに音環境がある。鎮静的な音楽が流れる環境は、呼吸数や主観的な緊張感などのストレス反応を低下させることが示されている (小竹・中村・高橋, 2004)。一方、消防車のサイレン音やホワイトノイズなどは $\alpha$ 波を減少させ、生体にストレスを与える可能性があることも示唆されている (Horii, Yamamura, Katsumata, & Uchiyama, 2004)。

小口 (1992) は、自己開示に影響を及ぼす状況要因としてその場の音を取り上げ、快適音としてクラシック音楽、不快音としてホワイトノイズを用いて、音環境が自己開示に及ぼす影響を検討した。その結果、男性は快適音が呈示された部屋を不快音が呈示された部屋よりも好ましく感じ、また快適音が呈示された部屋で自己開示を多く行っていた。一方、女性は不快音が呈示された部屋を好ましく感じ、不快音が呈示された部屋で多くの自己開示を行っていた。この結果も、男性が快適音によって、女性が不快音によって状況を快適だと感じたのだとすれば、状況の快適さが自己開示を促進したと解釈できる。しかし、男性、女性ともに、不快音として用いられたホワイトノイズ自体は不快な刺激だと感じていた。そのため、不快刺激を伴う環境が女性の自己開示を促進する可能性があることも否定できない。

黒川 (2005) は、初対面の二者による会話状況において、座席の配置および部屋の明るさがコミュニケーションに及ぼす影響を検討している。それによると、初対面の二者が明るい部屋で対面の位置に着席すると、相手と一緒にいることによる快適さは低下するものの、コミュニケーションは活発であった。一方、二者が並んで着席すると、快適さは高いものの、コミュニケーションの活発さは低下していた。また、暗い部屋ではこれと逆の結果になっていた。このように、自己開示に限定したものではないが、環境に快適さを低下させる何らかの要素が含まれることが、コミュニケーション量を増加させる可能性があることを示唆する知見もある。

コミュニケーションは個人の間を生じる緊張を緩和するために行われることがある (Newcomb, Turner, & Converse, 1965 古畑訳, 1973)。つまり、快適さを低下させる刺激を伴う環境では、その状況によって生じる緊張を緩和するために、コミュニケーション量が増加することも考えられる。また、認知的均衡理論 (Heider, 1958 大橋訳 1978) を用いることでも、不快な刺激を伴う環境がコミュニケーションを促進するメカニズムを説明することができる。コミュニケーションを行う両者が、不快刺激を伴う環境に同様にネガティブな感情を抱いているとき、相手に好意を感じることで認知的にバランスの良い状態になる。互いに好意を抱く二者間のコミュニケーションは増加することが示唆されている (黒川・若林, 2003)。すなわち、

コミュニケーションを行う二者が不快刺激を伴う環境に対してネガティブな感情を抱くことによって、両者の間に好意的感情が生まれ、その好意がコミュニケーションを促進すると考えることもできるのである。

自己開示には、開示内容の適切さを欠く場合、被開示者の開示者に対する評価を低下させるなどの危険性があり（深田, 1998）、開示者も状況に応じて慎重に自己開示を行うであろう。そのため、不快な状況によってコミュニケーション量が増加するとしても、自己開示が増加するとは限らない。むしろ、不快な状態が自己開示を抑制することを示す研究もある。Archer, Hormuth, & Berg (1982) は、客体的自覚状態という不快な状態が自己開示を抑制することを示している。また、男性は相手からの注視によって不快感が高まると、自己開示の量や親密度を低下させることも示されている（Ellsworth & Ross, 1975）。しかし、これらの研究は、自己開示を行う環境そのものの性質を取り上げたものではない。さらに小口（1992）の研究では、ホワイトノイズを用いた不快音環境が状況要因として取り上げられているものの、クラシック音楽を用いた快適な環境と比較した場合の不快音環境であり、快適ではなくても不快であったとは限らない。不快刺激を伴う環境が自己開示に及ぼす効果を検証するためには、快適音との対比ではなく、より明確な不快音を用いる必要がある。

不快音と言っても様々な種類のものが考えられるが、先述した Horii, et al. (2004) の研究でも指摘されているように、騒音は人にストレスを与える原因となり、不快音と捉えることができる。騒音には、自動車や列車、あるいは工事の音などの環境騒音、掃除機や洗濯機の音などの生活騒音、ならびに注意を向けられた音の背後に常に存在する何らかの音刺激である暗騒音などがある（近藤, 1986）。

もし、不快な状態が自己開示を抑制するように、不快刺激の存在が自己開示を抑制するのであれば、騒音を伴う環境では自己開示は抑制されると予想される。また、不快の程度が高い騒音であるほど、その傾向は強まるであろう。逆に不快刺激の存在が自己開示を促進するのであれば、騒音を伴う環境で自己開示は促進されると考えられる。そこで本研究では、音の中でも不快音と考えられる騒音を取り上げ、いくつかの種類騒音を用いて、不快音を伴う環境が自己開示に及ぼす影響を検討する。

## 方 法

### 実験参加者

大学生男性27名、女性27名。男女それぞれを、後述する音刺激の3条件に9名ずつ、ランダムに割り当てた。

## 実験計画

性別2（男性・女性）×音刺激3（環境騒音・生活騒音・暗騒音）の2要因計画。2要因とも実験参加者間計画であった。音刺激は、近藤（1986）の分類を参考に、環境騒音として工事現場の音、生活騒音として掃除機や洗濯機の音、暗騒音としてホワイトノイズを用いた。260cm×420cmの広さの実験室の四方を白い布で覆い、420cm側の一方の布の後ろにスピーカーを2個設置した。そのスピーカーから50～60dBで各条件の音刺激を呈示した。

## 従属変数

話題として、大坊（1977）および小口（1992）を参考に、①食べ物の好き嫌いについて、②好きな映画・音楽・本などについて、③自分の身体の嫌いなどところについて、および④人生の目的についての4つを用いた。これら4つの話題について実験参加者に話してもらい、その際の自己開示の内面性および量、音刺激および実験室に対する印象、ならびに自己開示時の気分を測定した。

**自己開示の内面性および量** 自己開示の内面性を「どれくらい内面的で深い内容を話しましたか」という項目で、自己開示の量を「どれくらいたくさん話しましたか」という項目で測定した。実験参加者は先述した4つの話題ごとに、自己開示の内面性および量を7件法で回答した。また、研究目的を知らされていない男女2名の大学生が、実験参加者が話している様子を録画したビデオを見ながら、実験参加者が回答したものと同様の項目を用いて、実験参加者の自己開示の内面性および量を4つの話題ごとに7件法で評定した。

**音刺激および実験室に対する印象** 実験参加者は、実験室で呈示されていた音刺激に対する印象および実験室全体に対する印象として、それぞれ「不快－快適」および「好き－嫌い」の2項目に7件法で回答した。また、音刺激に注意を向けていた程度を測定するために、「音はどの程度気になりましたか」という項目に7件法で回答した。

**自己開示時の気分** 実験参加者は、自己開示時の気分として、「話をするときにどの程度緊張していましたか」および「話をするときにどの程度リラックスしていましたか」の2項目に7件法で回答した。

## 手続き

音刺激の各条件に応じて、予め実験室に音刺激を呈示しておいた。実験者は実験参加者を実験室に案内し、話題が記された紙が入った4つの封筒（左の封筒から順に1, 2, 3, 4と表に書かれていた）が並べてある机の前の椅子に着席させた。

実験者は、実験の目的を「話題と話し声のトーンとの関係について調べること」と説明した。また、実験参加者が不必要に緊張することのないように、「能力や学力をテストするものでは

ないので、どうぞリラックスしてやってください。」と付け加えた。さらに、「この部屋は防音設備が十分でないため、隣室や建物の外の音が聞こえていると思います。話し声のトーンは周囲から聞こえる音とも関係すると言われていしますので、後ほど周囲から聞こえた音についても感じたことを聞かせていただきます。ただし、あなたの話し声以外の音は後ほど機械的に除去し、あなたの話し声のトーンだけを分析対象とします。」と告げ、音刺激に注意を向けさせた。

そして実験者は、4つの封筒それぞれにはある話題が書かれた紙が入っていること、その話題についてなるべく具体的に何でも自由に、好きなだけ話すように、そして封筒は1つずつ番号順に開け、1つの話題を話し終えてから次を開けるようにと指示した。途中、制限時間を知らせる合図のようなものはなく、実験参加者が話している間、実験者は部屋の外に出ているため、1つの話題についてどの程度話すかは実験参加者に任されていた。

次に、実験者は実験参加者からビデオで撮影する承諾を得、話す時もできるだけビデオカメラに向かって話すよう依頼した。不安を取り除くため、「記録したものは実験以外の目的では使用しないので安心してほしい。」と告げた。なお、直接人を相手にして話すのではなく、ビデオカメラに向かって話すようにしたのは、実験参加者の被開示者に対する印象（好意度）や非言語的相互作用（視線、うなずきなど）の影響を統制するためであった。

最後に、実験者は「私が部屋を出たら、封筒を開けて話し始めてください。全部話し終わったら、ドアを開けて知らせてください。」と告げ、ビデオカメラの録画スイッチを入れた後に退室し、実験室の外で待機した。

実験参加者がドアを開けて話し終えたことを知らせると、実験者は実験室に入り、ビデオカメラの録画スイッチを切り、実験参加者に従属変数を測定するための質問調査票に回答させた。実験参加者が回答を終えたところでデブリーフィングを行い、実験を終了した。全体で約20分の実験であった。

## 結 果

### 自己開示の内面性および量

自己開示の内面性および量は、4つの話題それぞれについての評定を合計したものを分析に用いた。なお、2名の観察者の評定の一致率は、自己開示の内面性において $r=.740$  ( $p<.01$ )、自己開示の量において $r=.810$  ( $p<.01$ ) であった。それぞれ高い値が得られたので、観察者評定として2名の観察者の評定の平均値を分析に用いた。条件毎に、自己開示の内面性に関する実験参加者による自己評定および観察者評定、ならびに自己開示の量に関する自己評定の平均値を示したのが表1である。また、自己開示の量に関する観察者評定の平均値を図1に示した。それぞれについて、性別2(男性・女性)×音刺激3(環境騒音・生活騒音・暗騒音)の分散分析を行った。

表1 自己開示の内面性および量

	内面性		量
	自己評定	観察者評定	自己評定
男性			
環境騒音	16.67 (4.85)	13.56 (2.87)	13.67 (3.30)
生活騒音	18.78 (5.59)	15.33 (4.97)	17.33 (4.52)
暗騒音	17.33 (5.10)	14.11 (3.60)	18.11 (3.48)
女性			
環境騒音	18.67 (5.66)	16.89 (4.28)	18.00 (3.16)
生活騒音	16.44 (4.62)	14.00 (2.31)	17.67 (3.43)
暗騒音	15.67 (4.50)	14.78 (3.43)	18.22 (4.10)

( )内はSD

**自己開示の内面性** 自己開示の内面性について、自己評定、観察者評定ともに、いずれの主効果および交互作用も有意ではなかった（自己評定  $F_{(1,48)} < 1, n.s.$  ; 観察者評定・性別の主効果  $F_{(1,48)} = 0.70, n.s.$  ; 音刺激の主効果  $F_{(2,48)} = 0.19, n.s.$  ; 交互作用  $F_{(2,48)} = 1.62, n.s.$ ）。

**自己開示の量** 自己評定による自己開示の量について、いずれの主効果および交互作用も有意ではなかった（性別の主効果  $F_{(1,48)} = 2.23, n.s.$  ; 音刺激の主効果  $F_{(2,48)} = 1.69, n.s.$  ; 交互作用  $F_{(2,48)} = 1.65, n.s.$ ）。観察者評定による自己開示の量については、いずれの主効果も有意ではなかったが（ $F_{(1,48)} < 1, n.s.$ ）、性別と音刺激との有意な交互作用が認められた（ $F_{(2,48)} = 3.32, p < .05$ ）。下位検定の結果、環境騒音条件において、女性（ $M = 18.90, SD = 5.51$ ）の方が男性（ $M = 12.57, SD = 4.09$ ）よりも自己開示の量が有意に多かった（ $F_{(1,48)} = 4.95, p < .05$ ）。

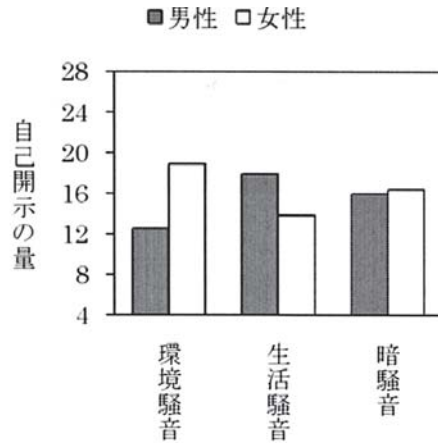


図1 観察者評定による自己開示の量

**音刺激および実験室に対する印象**

音刺激および実験室に対する印象は、印象がポジティブであるほど値が高くなるように得点化し、それぞれ2項目への回答の合計を分析に用いた。各条件の音刺激に対する印象の平均値を図2に、実験室に対する印象および音刺激に向けていた注意の程度の平均値を表2に示す。それぞれについて、性別2×音刺激3の分散分析を行った。



**音刺激に対する印象** 音刺激に対する印象については、性別の主効果に有意傾向が認められ ( $F(1, 48)=2.95, p<.10$ )、女性の音刺激に対する印象 ( $M=5.73, SD=1.42$ ) の方が、男性 ( $M=6.73, SD=2.28$ ) よりもネガティブである傾向が見られた。音刺激の主効果および交互作用は有意ではなかった ( $F_s<1, n.s.$ )。

**実験室に対する印象** 実験室に対する印象について、いずれの主効果および交互作用も有意ではなかった (性別の主効果  $F(1, 48)=0.97, n.s.$ ; 音刺激の主効果  $F(2, 48)=2.03, n.s.$ ; 交互作用  $F(2, 48)=0.14, n.s.$ )。

**音刺激に向けた注意の程度** 音刺激に向けた注意の程度について、いずれの主効果および交互作用も有意ではなかった (性別の主効果  $F(1, 48)=1.40, n.s.$ ; 音刺激の主効果  $F(2, 48)=0.49, n.s.$ ; 交互作用  $F(2, 48)=0.96, n.s.$ )。

### 自己開示時の気分

「話をするときにはどの程度緊張していましたか」(以下、緊張度と記す) および「話をするときにはどの程度リラックスしていましたか」(以下、リラックス度と記す) という質問項目に対する回答の平均値を条件別に示したのが図3および図4である。それぞれについて、性別2×音刺激3の分散分析を行った。

**緊張度** 緊張度については、いずれの主効果も有意ではなかったが (性別の主効果  $F(1, 48)=2.65, n.s.$ ; 音刺激の主効果  $F(2, 48)=1.33, n.s.$ )、性別と音刺激との有意な交互作用が認められた ( $F(2, 48)=3.49, p<.05$ )。下位検定の結果、生活騒音条件において、女性 ( $M=6.00, SD=0.67$ ) の方が男性 ( $M=4.00, SD=2.00$ ) よりも緊張の

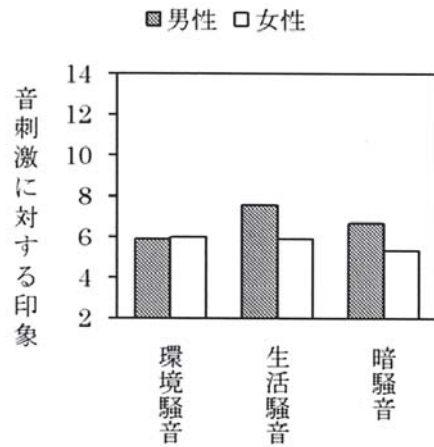


図2 音刺激に対する印象

表2 実験室に対する印象および音刺激に向けた注意

	実験室に対する印象	音刺激に向けた注意
男性		
環境騒音	8.44 (1.17)	2.78 (1.87)
生活騒音	8.56 (1.38)	3.78 (2.70)
暗騒音	7.89 (0.88)	3.44 (1.77)
女性		
環境騒音	7.45 (0.97)	4.56 (2.01)
生活騒音	8.66 (0.69)	4.33 (2.06)
暗騒音	8.11 (0.47)	3.22 (1.81)

( )内はSD

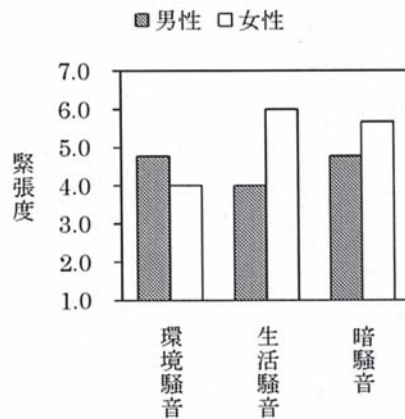


図3 自己開示時の緊張度

程度が有意に高かった ( $F_{(1, 48)}=7.13, p<.05$ )。また、女性において音刺激の有意な単純主効果が認められた ( $F_{(2, 48)}=4.10, p<.05$ )。多重比較の結果、女性は環境騒音条件 ( $M=4.00, SD=1.94$ ) よりも、生活騒音条件および暗騒音条件 ( $M=5.67, SD=1.49$ ) において緊張の程度が有意に高かった (いずれも  $p<.05$ )。

**リラックス度** リラックス度については、性別の主効果が有意であり ( $F_{(1, 48)}=6.78, p<.05$ )、女性 ( $M=2.93, SD=1.12$ ) の方が男性 ( $M=3.77, SD=1.29$ ) よりもリラックスの程度が有意に低かった。また、音刺激の主効果に有意傾向が認められた ( $F_{(2, 48)}=2.71, p<.10$ )。多重比較の結果、環境騒音条件 ( $M=3.90, SD=1.10$ ) よりも生活騒音条件 ( $M=3.05, SD=1.35$ ) および暗騒音条件 ( $M=3.10, SD=1.20$ ) において、リラックスの程度が低い傾向にあった。性別と音刺激との交互作用は有意ではなかった ( $F_{(2, 48)}=0.47, n.s.$ )。

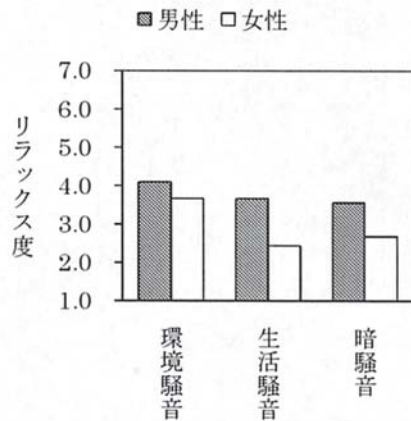


図4 自己開示時のリラックス度

## 考 察

本研究の目的は、騒音という不快音を伴う環境が自己開示に及ぼす影響を検討することであった。

自己開示の内面性には、自己評定、観察者評定ともに、性別や騒音の種類による差異は見られなかった。すなわち、男性、女性ともに、どのような騒音を伴う環境であるかということと、どの程度内面的な自己開示を行うかということとに関連は見られなかった。ただし、自己開示の内面性は関係が親密になるほど深まり、それによってさらに関係性も進展することが示唆されている (Hendrick, 1981; Worthy, Gary, & Kahn, 1969)。つまり、自己開示の内面性は開示者と被開示者との関係の親密さに強く規定される。本研究では、被開示者からの反応を知ることができない状況で、未知の人を対象に自己開示を行う場面が設定されており、自己開示の内面性を深めるような関係は形成され得なかった。そのため、もともと内面的な自己開示が行われにくく、性別や騒音の種類による差異が見られなかったとも考えられる。

自己開示の量に関しても、自己評定では性別および騒音の種類による差異は見られなかった。一方、観察者評定によると、環境騒音である工事現場の音がしていたときに、女性の方が男性よりも自己開示を多く行っていた。この結果は、環境騒音を伴う環境が女性の自己開示を促進した、あるいは男性の自己開示を抑制したと考えることもできるであろう。しかし、このよう



な結果となった理由については、実験参加者の騒音を伴う環境に対する印象、あるいは自己開示時の気分と併せて考える必要がある。

騒音および自己開示を行う環境全体に対する印象、ならびに騒音が気になった程度について見てみると、騒音の種類による差異は見られなかった。しかし、自己開示時の気分には騒音の種類による差異が見られた。男性、女性ともに、環境騒音よりも、生活騒音である掃除機や洗濯機の音、あるいは暗騒音であるホワイトノイズが聞こえる環境で自己開示をしたときに、リラクスの程度低い傾向にあった。さらに女性は、環境騒音と比較して、生活騒音あるいは暗騒音を伴う環境で自己開示をしたときに緊張の程度が高かった。

また、女性は男性よりも騒音を不快あるいは好ましくないと感じる傾向があり、自己開示を行ったときのリラクスの程度も低かった。特に生活騒音を伴う環境では、女性は男性よりも自己開示を行ったときの緊張の程度が高かった。すなわち、男性よりも女性の方が、不快音を伴う環境で自己開示を行うという状況を全体としてネガティブに感じていた。

従来から、女性は男性よりも自己開示を多く行うことが示されている（榎本, 1987; Jourard & Lasakow, 1958等）。本研究で自己開示の量に明確な性差が示されなかったのは、騒音を伴う環境で自己開示を行うという状況を、非常に不快であると感じた女性の自己開示が大きく抑制されたのに対し、男性の自己開示は抑制される程度が比較的小さかったためだと考えられる。その中でも、環境騒音を伴う環境は、女性にとって緊張の程度が低く、比較的不快の程度が低い状況であったため、自己開示が抑制される程度が弱かったのであろう。すなわち、環境騒音を伴う環境で女性が男性よりも自己開示を多く行ったのは、その状況が女性の自己開示を促進したというよりも、一般的に見られる自己開示の性差が顕現化したのだと考えられる。それに対し、生活騒音や暗騒音を伴う環境では、男性の自己開示は抑制される程度が小さく、女性の自己開示は大きく抑制されたため、自己開示の性差が消失し、男性と女性が同程度の量の自己開示を行ったのだと考えられる。

ただし、自己開示時の気分と自己開示の量との関係については、女性は環境騒音を伴う環境で自己開示を多く行うことができ、それによって緊張を感じずリラックスできたと考えることもできる。すなわち、騒音やそれを伴う環境の何らかの属性によって自己開示が促進あるいは抑制され、それに引き続いて緊張やリラックスなどの気分が変化した可能性も否定できない。また本研究では、騒音やそれを伴う環境に対する印象と、自己開示時の気分とに対応関係が見られなかった。これは騒音や環境に対する印象をポジティブかネガティブかの次元、自己開示時の気分も緊張とリラクスの次元でしか捉えていないことに起因するであろう。さらに、男性の自己開示に騒音の種類による明確な差は示されなかった。騒音に含まれるどのような属性が、どのような印象や気分をもたらし、さらには自己開示にどのような影響を及ぼすのかについて、性差を考慮しながら、さらに検討する必要がある。

また本研究では、先述したように、被開示者との非言語的相互作用の影響を統制するために、被開示者からの反応を知ることができない状況で自己開示が行われた。そのため、認知的均衡理論で予想される、同じ対象に同様の態度をもつ相手に抱く好意的感情など、不快音を伴う環境でコミュニケーションを促進する可能性がある媒介過程についての検討はできていない。また、関係がある程度進展した二者間では、その関係性によって不快音を伴う環境に対する印象や気分が異なり、自己開示のあり方も変わってくるのが予想される。開示者の被開示者に対する印象、あるいは視線やジェスチャーなどを統制することは困難になるが、開示者と被開示者との不快音を伴う環境を共有することで生じる特有の影響についても検討する必要がある。

さらに、女性の自己開示について、騒音の種類による差異が見られたのは、観察者評定による自己開示の量のみであった。そのため、多くの自己開示を行ったか否かについて、開示者本人が自覚していたとは言えない。また不快音を伴う環境が、開示者だけでなく、被開示者としての観察者にも影響を及ぼした可能性がある。騒音が被開示者にとっても不快な状況を作り出すのであれば、自己開示行動に対する被開示者の認知にも何らかの影響を及ぼすことが予想される。したがって、自己評定や観察者評定だけでなく、発話時間や情報量など、客観的な指標を用いて自己開示を検討する必要がある。

以上のような課題は残されているものの、騒音によって引き起こされる緊張が強い場合には従来の研究で示されている性差が見られず、緊張が弱い場合には、従来の知見と同様に女性の自己開示が多かったことから、ネガティブな気分を引き起こす不快音を伴う環境は、特に女性の自己開示を抑制することが示唆された。

## 引用文献

- 安藤清志 (1986). 対人関係における自己開示の機能 東京女子大学紀要論集, **36**, 167-199.
- 安藤清志 (1990). V 「自己の姿の表出」の段階 中村陽吉 (編) 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会 pp.143-198.
- Archer, R. L., Hormuth, S. E., & Berg, J. H. (1982). Avoidance of self-disclosure: An experiment under conditions of self-awareness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **8**, 122-128.
- Chaikin, A. L., Derlega, V. J., & Miller, S. J. (1976). Effects of room environment on self-disclosure in a counseling analogue. *Journal of counseling psychology*, **23**, 479-481.
- 大坊郁夫 (1977). 話題の重要度評定とその因子構造 札幌医科大学医学進学過程紀要, **18**, 1-12.
- Ellsworth, P., & Ross, L. (1975). Intimacy in response to direct gaze. *Journal of Experimental Social Psychology*, **11**, 592-613.
- 榎本博明 (1987). 青年期 (大学生) における自己開示性とその性差について 心理学研究, **58**, 91-97.
- 榎本博明・清水弘司 (1992). 自己開示と孤独感 心理学研究, **63**, 114-117.
- 深田博己 (1998). インターパーソナル・コミュニケーションー対人コミュニケーションの心理学ー 北大路書房
- Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley.
- (ハイダー F. 大橋正夫 (訳) (1978) 対人関係の心理学 誠信書房)

- Hendrick, S. S. (1981). Self-disclosure and marital satisfaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 1150-1159.
- Horii, A., Yamamura, C., Katsumata, T., & Uchiyama, A. (2004). Physiological response to unpleasant sounds. *Journal of International Society of Life Information Science*, **22**, 536-544.
- Jourard, S. M. (1971). *The Transparent Self*. Revised ed. New York: Van Nostrand Reinhold.  
(ジュラード S. M. 岡堂哲雄 (訳) (1983). 透明なる自己 誠信書房)
- Jourard, S. M., & Lasakow, P. (1958). Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **56**, 91-98.
- 近藤暹 (1986). 音と行動の科学 同文書院
- 黒川光流 (2005). 初対面時の会話において部屋の環境が発話および印象に及ぼす影響 富山大学人文学部紀要, **43**, 23-34.
- 黒川光流・若林美江 (2003). 2 者の対面的コミュニケーションにおいて好悪感情が発言行動に及ぼす影響 富山大学人文学部紀要, **39**, 1-16.
- 小竹訓子・中村恵子・高橋由紀 (2004). 音楽療法のリラクセーション効果に関する研究 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, **5**, 1-10.
- Mulcahy, G. A. (1973). Sex difference in patterns of self-disclosure among adolescents: A developmental perspective. *Journal of Youth and Adolescence*, **2**, 343-356.
- Newcomb, T. M., Turner, R. H., & Converse, P. E. (1965). *Social psychology: The study of human interaction*. New York: Holt, Rinehart.  
(ニューカム T. M.・ターナー R. H.・コンヴァース P. E. 古畑和孝 (訳) (1973). 社会心理学：人間の相互作用の研究 岩波書店)
- 小口孝司 (1992). 音環境が自己開示に及ぼす効果 実験社会心理学研究, **32**, 27-33.
- Rohrbeg, R. G., & Sousa-Poza, J. F. (1976). Alcohol, field dependence, and dyadic self-disclosure. *Psychological Reports*, **39**, 1151-1161.
- Skotko, V. P., & Langmeyer, D. (1977). The effects of interaction distance and gender on self-disclosure in dyads. *Sociometry*, **40**, 178-182.
- Slobin, D. I., Miller, S. H., & Porter, L. W. (1968). Forms of address and social relations in a business organization. *Journal of Personality and Social Psychology*, **8**, 289-293.
- 高木浩人 (1992). 自己開示行動に対する認知と対人魅力に関する研究 — 親密な関係とそうでない関係の比較 — 実験社会心理学研究, **32**, 60-70.
- Worthy, M., Gary, A. L., & Kahn, G. M. (1969). Self-disclosure as an exchange process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **13**, 59-63.
- 有倉巳幸 (2000). 人間関係は「夜」作られるか? — 昼と夜の自己開示の違いに注目して — 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, **51**, 267-283.

## 注

- 1) 2006 年度富山大学人文学部卒業生